

## 「傷逝」子君像の再考

李 爲民

### 0. はじめに

1925 年に書かれた小説「傷逝」は、魯迅が男女の恋愛を描いた唯一の作品である。1926 年、彼の小説集『彷徨』に収録される以前に、雑誌、新聞などに発表されたことはない。叙述の便宜のため、「傷逝」のあらすじを述べておく。

男性主人公涓生と恋人の子君は、二人とも知識人であり、五・四運動前後 [1919]<sup>1</sup> 盛んに宣伝された「個性の解放」、「恋愛の自由」、「男女平等」等の思想を信じている。彼らは、周りの反対を無視して、旧道德（儒教の教えを中心とする「三綱五常」<sup>2</sup>）に逆らい、自主的な婚姻を目指し、自由な恋愛を経て共同生活を始める。しかし一年足らずのうちに、二人の間にひびが入り、涓生の失業をきっかけに、関係が破綻する。涓生の愛だけを頼りにしていた子君は、愛していないという真実を涓生に告白され、やむを得ず実家に引き戻され、まもなく死ぬ。独りで生きていこうとする涓生は、子君の死を知り、愛していないという真実を告げたことを後悔し、子君に対する悔恨と悲哀をいだき、新しい道を歩んでいこうとする。

涓生と子君は、かつて個性の解放、自主的な婚姻という信念・理想を実現するため、旧社会<sup>3</sup>に抵抗し戦ったが、結局涓生の失職及び子君の死という結末を招き、恋愛の自由に基づいて作り上げられた近代的な小家庭は失敗した。先行研究では、二人の破綻の原因が旧社会の重圧にあるのか、涓生にあるのか、ひいては子君にあるのかについて論じられてきた〔後述〕。本稿は、旧社会の重圧や涓生の責任などの論点とは別に、現実生活の中に表れた子君自身の弱点もその破綻の原因の一つであることを論証する。筆者は、子君の言動から、子君が意識上の強者でありながら現実生活では弱者であり、特に彼女自身が実際の生活の弱点を持つことによって、結局は涓生との共同生活が破綻したのではないかと考える。

本論に入る前に、涓生と子君の破綻の原因について指摘されてきた論点を以

下にまとめる。

第一に、二人の破綻の原因を旧社会の重圧に求めるものである<sup>4</sup>。二人の行動が旧社会においては許されないため、子君は家族、叔父と縁を切り、涓生も友人と断交せざるをえなくなる。とうとう同棲が発覚すると、涓生は職を奪われ、二人の生活が成り立たなくなってしまう。そのため旧社会の重圧は涓生と子君の破綻の主な原因であるとされた。次に、二人の破綻の原因を根本的には旧社会の重圧にあるとしながらも、中国旧社会から遊離し独り歩きをする近代の恋愛観<sup>5</sup>に翻弄された、目覚めた青年知識人の悲劇という論説である<sup>6</sup>。「傷逝」の社会背景となる五・四運動前後、個性の解放、男女平等、恋愛の自由といった新思想が新聞、雑誌にあふれており、青年知識人の涓生と子君は、時代の波に乗り、新思想を自分の理想、信念とし、更には実行に移した。しかし現実と理想の間にギャップがあることが、後に共同生活を始めてから分かってくる。涓生はそれに気づき、人生の基本は生きることであるということを自覚しはじめるのに対して、子君は涓生の愛に浸かり、わからぬままに死ぬ。このような五・四運動前後に提唱された近代の恋愛観の受容については、中井（1987）、李希凡（1988）が分析している。第三に、涓生のエゴイズムが二人の破綻、特に子君の死を直接導いたという分析がなされた<sup>7</sup>。生活が苦しい中で生き残りたい涓生は、彼の愛を唯一の頼りとする子君に「愛していないんだ」と告げた。この言葉は子君にとって死刑の宣告と同じである。旧社会では、親の反対を無視し、男に見放された女性に生きる道がほとんどないからである。第四に、二人の内的崩壊に破綻の原因を求める、王維平（1987）、中井（1987）などがある。

作品からみると、涓生と子君の恋愛悲劇は、『梁祝』<sup>8</sup>のように明らかに封建礼教の直接の重圧であるとは描かれていない。世上の世論と周りの冷眼は彼ら（涓生と子君）にたいした作用はしていない。しかも、この新しい形式の家庭はまさしくその厳しい環境の中で誕生したものである。涓生の解雇は、彼らの愛の延長、破綻を決める根本的な環節ではなく、彼らの恋愛悲劇の中で必然的過程のひとつの契機であると言わなくてはならない。更に、社会の直接の重圧について作者はたくさんの筆を費やさず、反対に二人の葛藤については大変たくさん書いているので、この悲劇が二人の内面から展開するというを見せている。この陣営内部（涓生と子君の内的——筆者注）の崩壊は第三者が災いしてもたらされるわけではない。（王維平 1987, p.362）

根本的原因としての外部的圧迫と同時に、小家庭の内部に醸成された破綻の

原因としての要素もあった。(中井 1987, p.105)

即ち涓生と子君の破綻の原因は、旧社会の重圧という外部原因のほか、涓生、子君にもある、つまり二人自身が破綻に責任を負うべきであるとする。

上記の主旨から子君側の問題を考えてみる必要があると、筆者は考える。

次章では、先行研究の論点を取り上げ、分析した上で、問題点を提出する。次に、子君が意識上の強者と現実生活の弱者を兼ねるものであることを指摘し、子君の現実生活に表れる弱点が二人の破綻の原因でもあることを論じる。

## 1. 先行研究

まず、子君に関する論から見てみよう。

### 1.1. 「個性の解放」を武器にする子君

子君は新思想として掲げられる「個性の解放」を、封建的家庭に反抗する武器にし、涓生と自由な恋愛をし、共同生活を勝ち得たと指摘した論著に、唐弢、張永泉、趙曉笛、憑奇などがある。

ノラ(イブセンの『人形の家』の主人公——筆者注)は夫の家から去る一方、子君は父親の家(実は身を寄せる叔父の家——筆者注)を出る。つまるところ、彼女たちが追求するのは個人の自由な生活であり、用いるのは個性の解放という武器である。(唐弢 1981, p.26)

涓生と子君は、五・四時代ブルジョアジーの個性解放の思潮に目覚めたプチブル青年知識人である。個性の解放が、彼らに人間的な啓蒙教育を受けさせ、人間性を自覚させる。その上、彼らに自己の価値、尊厳を維持する要求と勇気を与える。故に、彼らは封建礼教の枠を突き破り、完全に自由な結合に至る。(張永泉 1987, p.221)

子君は、涓生との愛のために、反対を一切押し切り、毅然として封建的家を出、恐いもの知らずの勇気と決意を示す。(中略)彼女が大胆に「私は私自身のものです。あの人たちの誰も、私に干渉する権利はありません」と言い出す。これは確かに新しい「中国女性」が成長し始めたことを表すと同時に、五・四の反封建思潮の中で、個性の解放がある程度の効力を発揮したことを示すものでもある。(趙曉笛、憑奇 1987, p.348)

しかしながら、問題は次の点にあるとする。

浅薄なのは子君ではなく、彼女が頼りとするブルジョアジーの個性の解放の思想武器である。無情であるのは涓生ではなく、彼を圧迫する、帝国主義に保護される封建勢力である。(唐弢前掲, p.28)

子君が「暗黒な悪い勢力に圧迫された」と、魯迅は言う。この一言は、涓生と子君の愛の悲劇をずばりと言っている。根本から言えば、彼らの恋愛悲劇は暗黒な社会に残酷に圧迫された結果である。(張永泉前掲, p.232)

魯迅から見れば、子君はまさしく中国のノラである。ただノラが暮らしている社会より中国の社会のほうが一層暗黒なため、子君の運命はノラより悲惨である。(趙曉笛、憑奇前掲, p.353)

このように子君は個性の解放を戦う武器にし、封建的家族の反対を押し切り、涓生との結合に至ろうとしたこと、あるいは「私は私自身のものです。あの人たちの誰も、私に干渉する権利はありません」という子君の言葉を、個性の解放が芽生えた印とし、子君の勇敢さ、恐いもの知らずの精神を肯定しつつ、二人の破綻が「個性の解放」に基づいて、暗黒な旧社会の中で結ばれたため、と大体同じような結論を出している。この論点に対して筆者は次の二つの問題点を提出する。

第一に、反封建・反伝統の新文化運動<sup>9</sup>は、「存天理、滅人欲」を理念とする儒教の倫理社会を西洋思潮の影響、特に自由平等思想の立場から強く批判し、「個性の解放」というスローガンを唱える。個性を踏み潰す専制社会を崩壊させるために「個性の解放」は有力な武器であるとする。これは当時進歩的な知識人達の考えである。男性を主体とする旧社会では、女性は男性に従わねばならず、女性のアイデンティティー、即ち個性が無視される。恋愛、結婚をはじめ、自己、個性を含む社会行為の中で、女性はその権利を奪われ、自主的に選択できず、選ばれる地位に置かれたままである。この意味で、目覚めた女性は、「個性の解放」を求める意識が切実だと言えよう。子君が五・四運動前後の青年知識人として、「個性の解放」を強く追求する理由が理解できる。しかし、子君は、「傷逝」の最初の段落に書かれているように、自ら「個性の解放」という思想を追求するのではなく、涓生から新思想の啓蒙を受けている。子君は、「個性の解放」という新思想を宣伝する涓生を愛してから、涓生が宣伝した新思想を受け入れた。言い換えれば、子君は、「個性の解放」という思想のために涓生を愛し、封建的家庭に反抗するのではなく、涓生を愛したため、「個性の解放」

の行為をとった。上に引用した論点は、子君が涓生を愛し、「個性の解放」の行動をとるという事実を軽視し、社会背景の影響を拡大視して、二人の破綻の中で涓生と子君の個としての内的側面を見逃しているのではないかと考える。

第二に、涓生を愛する子君が正々堂々と涓生と一緒に行動するという固い決意を示している段階では、子君が「個性の解放」といった新思想に目覚め、俗社会に反抗するに際して、「個性の解放」の積極的な働きを否定できない。しかしそれにもかかわらず、共同生活が始まると、日常生活の中で子君は段々弱くなっていく。共同生活以前に比べると、子君の弱々しさは一目瞭然である。この場合、子君は愛する人と一緒になったため、「個性の解放」を信じなくなってしまったのか、あるいは「個性の解放」を武器にしても現実問題を解決できなかったのかについては、十分に説明できない。つまり、「個性の解放」を武器にする子君という論には、共同生活前後の子君について説明できない点がまだ残っていると思われる。

## 1.2. 愛を人生の第一義とする子君

涓生と子君には共同生活が始まってから、思いがけない一連の出来事が起こる。切りの無い家事、家主とのいさかい、涓生の失職、再就職の困難、赤字の生活など、厳しい現実と直面する際、涓生と子君は明らかに違う態度をとった。現実の生活を考えたうえで、人生の大事な意味は生きていくことだと思う涓生に対し、子君は始終涓生の愛に浸かり、それを人生の第一義であると考えた。杉野は次のように指摘している。

エリス（森鷗外の『舞姫』女主人公）と子君は、愛を人生の第一義としていたのに対し、豊太郎（『舞姫』男主人公）と涓生は愛を人生の第一義とすることができなかった。（杉野 1993, p.37）

林非は、涓生の言葉を借り、子君がただ盲目的な愛のために生きていることを次のように指摘している。

子君の、「ただ愛——盲目的な愛——のために、人生における別のだいじな意義を、すっかりおろそかにしていた」生活から見ると、彼女は、確かに新しい女性の特徴が乏しくて、まだ夫第一という伝統的な女性の考え方をもっている。（林非 1996, p.213）

李希凡は、子君、涓生が互いに持つ愛を次のように述べている。

まさしく涓生が言うように、当時子君の理想を支持したのは愛である。「彼女のあの時の、勇敢さと恐れ知らずは愛があったからなのだ」、愛は彼女に勇気を与え、その愛のために一切構わず戦う。(中略)彼女(子君)は既に叔父と喧嘩別れし、そして父親と縁を切り、更に社会のあらゆる嘲笑と冷遇に直面しなければならない。彼女が得るのは、ただ魅惑的な新しい愛と、その愛がもたらす神秘的で計りがたい夢である。(中略)その時、愛は彼ら(涓生と子君)の心の中で、既に物質を越えた力であり、弱々しい子君に何も恐れない勇気を与え、涓生の生活と心の中の寂寞、空虚も埋める。彼らにとっては、愛はすべてであり、愛のために一切構わず、戦う。(李希凡 1988, p.209 - 210)

李希凡が指摘した「子君の理想」とは、五・四運動前後に唱えられた「個性の解放」、恋愛の自由という新理想である。李希凡は、子君の憧れ信じる新理想が中国の現実には合致せず、上滑りな物で、その欺瞞性が涓生と子君の悲劇を起こす最大の原因であると分析し、次のように述べている。

実際に最大の悲劇の真相は、彼らがブルジョアジーの個性の解放、恋愛の自由という空中楼阁的な信条に欺かれ、その虚しい信条が純粋な少女の愛を踏みにじったことである。その信条が暗黒な重圧のもとで空虚になった時に、涓生自身は子君を新たな活路へ導く理想や信念を失っていた。(前掲, p.218)

子君に対して、李希凡は「恐れ知らずの子君も臆病な子君も、この虚しい信条から作り出されたのである」(p.221)という論を示す。李希凡によると、子君が周りの反対を押し切り、涓生との共同生活を決意するのは、恋愛の自由という虚しい信条を信じるゆえである。共同生活の後、厳しい現実には直面し、子君はだんだん臆病になっていた。これも子君が「個性の解放」、恋愛の自由といった信条を放棄していなかったためである。「傷逝」の主題について李希凡は次のように指摘している。

残酷な現実、暗黒な封建勢力が涓生と子君の愛を死に迫りやるが、彼ら(涓生と子君——筆者注)に呼びかける個性の解放、恋愛の自由、つまり「新理想」は、その欺瞞性が男女主人公の血だらけな心の痛手によって暴かれる。それが、子君の愛をぶち壊し、涓生の理想をも滅ぼす。魯迅が「傷逝」の中で人々に示すものは、決して子君の「恋愛至上主義」あるいは涓生の賢明な

理性と奮い立っていく情熱のようなものではない。むしろ彼らが共に信じる所謂新理想は現実にあつかり、壊されるということである。それは子君の悲劇であり、涓生の悲劇でもある。(前掲, p.221)

このように解釈すれば、二人の破綻の原因を新理想に、また子君にその新理想を教えた涓生に求めることができるのではないか。これは、涓生の免罪論<sup>10</sup>と同様に、子君の責任を免罪し、転嫁するものではないだろうか。子君は決して「個性の解放」といった虚しい信条を信じ、涓生を愛するわけではない。「傷逝」の内容から見ると、涓生と子君が持つ愛情は互いに自然に芽生えたものである。涓生自身は、子君が求める対象であり、子君にとっては、涓生が魅力的なのである。涓生の行動は、新思潮の先端に立つ青年知識人として新思想を恋人に宣伝するものであり、旧社会において積極的な意義を持つと言える。共同生活の中で、「涓生自身は子君を新たな活路へ導く理想や信念を失っていた」というより、むしろ子君自身が新たな活路を導く理想や信念を見出さなかったと言える。真の異性愛は男女両方から発する行為であり、愛する際、双方とも責任を負うべきである。涓生と子君の場合は、李希凡が述べた新思想の空虚さ、青年知識人である涓生に現れたエゴイズムが、二人の破綻の原因の一つであることは否定できない。しかし外部要素のほかに、二人の間に生じた疎隔や日常生活の中で子君自身に現れた弱点が存在する。

以下に、先行研究の検討を通して得られた要点を簡単にまとめる。

第一に、子君が「個性の解放」を武器にしたという論は、二人の破綻の原因が旧社会の重圧にあると結論付けている。

第二に、子君が愛を人生の第一義とするという論は、二人の破綻の原因を子君にではなく、恋愛の自由という新理想・信念を教えた涓生のほうに求める。

第三に、二人の破綻の原因として、日常生活の中で子君自身に欠けているところ、つまり現実生活をうまくやっていないという子君自身に現れた弱点について、これまであまり論じられていない。

## 2. 意識上の強者と現実生活の弱者を重ねる子君

以上、「傷逝」研究史における論点を整理し、明らかになった一つの問題点は次の通りである。つまり、旧社会において許されない行為である自由恋愛を正々堂々で行い、涓生と共同生活を決意した強い子君と、共同生活後家事ができず

日常生活でうまくやっていけず、涓生の失職でだんだん臆病になっていった弱い子君を如何に解釈するのかという課題である。この課題を解明するため、次に「傷逝」の内容を踏まえ、子君の言動を考察していく。

## 2.1. 意識上の強者

子君は、郷里の家を離れ都会の叔父の家に身を寄せて暮らしている知識人女性であり、公務員の知識人青年である涓生と交際している。

専制的家族制度の話、古い習慣を打破する話、男女平等の話、イプセンの話、タゴールの話、シェリーの話……。彼女はいつも微笑を浮かべてうなずく。両眼にあどけない好奇の光があふれる。（『魯迅全集』日本語版，p.317）

このように、子君は、涓生の影響で「個性の解放」などの思想の影響を受け、交際を始めた半年後、叔父や郷里にいる父親について涓生と話した際、子君は毅然とした、落ち着いた口調で、

私は私自身のものです。あの人たちの誰も、私に干渉する権利はありません（前掲，p.318）

と言った。それまでに、涓生は既に「自分の考え、自分の身の上、自分の欠点を、ほとんど隠すことなく言い尽くしていた。」（前掲）子君も涓生が言ったことを完全に理解していた。つまり、子君は涓生のことを知り、分かったうえで、好きになって交際をしているのである。更に、涓生のプロポーズに対し、純情な子君は恥ずかしそうに受けとめた。

彼女の顔色がさっと青ざめ、その後しだいに真っ赤な——それまで見たことのない、そして、その後二度と見たことのない真っ赤な色に変わっていったのだけは、どうやら覚えている。彼女は、つとめて僕の視線を避け、おどおどと窓を破って飛んで行きたそうであったが、あどけない眼から、悲しみと喜びの、だが驚き、いぶかしむ気持ちのまじった光が射していた。しかし僕は、彼女がすでに僕を許していることがわかった。（前掲，p.319）

このように、子君の純粋な表情は、愛する涓生に引かれ、自然に内から出るものであり、決して新思想に対する反応ではない。

共同生活が始まる前、愛のために、勇敢かつ怖いもの知らずで俗社会に反抗する子君が描かれている。周りが「しょっちゅう好奇と、嘲笑と、卑猥と、軽



蔑の視線」で二人のことを見ているが、それに対して、子君は、「恐れ知らずで、まわりに目もくれず、無人の境に行くように、平然と、落ち着きはらってゆっくりと」（前掲，p.320）している。この段階における子君の大胆さは、周りの白い目に恐れる涓生と比べると、著しい。

子君は、涓生と交際することにより、まわりの反対を無視し、親と決裂し、身を置く叔父と喧嘩別れをするなど、一連の行動を通し、自主的な婚姻を求めるという意志を表している。考えを実際の行動に移し、その行動を取ることで、子君の強さが裏付けられる。ゆえに、この段階の子君を意識上の「強者」と位置づける。子君が意識上の「強者」になるには涓生の存在が欠かせない。理由は以下の通りである。

「傷逝」の冒頭に描かれているように、子君と涓生は自由な恋愛をしていた。子君は涓生と知りあい、恋に落ち、彼が吹き込む新思想を受けとめ、自由な婚姻を求めるという意志が、涓生の存在と実際に自由な恋愛をすることによってより強くなってきた。意思疎通のできる涓生がおり、その上に築き上げた二人の愛は、子君が大胆な行動をする力の源である。

次に、涓生が宣伝している新思想も子君の意識に大きな影響を与えた。自ら新思想に興味がある涓生と違って、子君の方は涓生の吹き込む新思想を受けてから、自主的な婚姻に目覚めた。子君が新思想に目覚めたのは、涓生という存在と切り離せない。

最後に、共同生活が始まる前、二人は、子君の家庭及び叔父の反対や周りの偏見など、旧道德の非難に見舞われた。この非難に対して、子君は、怖いもの知らずの精神で戦った。この意識上の対決は、結局二人の共同生活が始まることにより、子君の方が勝ったことになる。但し子君自身の勝利ではなく、涓生との二人の勝利である。子君と涓生は、愛しあい、共同生活自体は既に二人の意志で決めたものである。意識上の強者である子君は、その強さを築くうえで涓生が欠かせない。

以上のように、意識上の強者である子君は、涓生がいなければ存在できない、言い換えれば、恋人の涓生がいるからこそ、意識上の強者である子君が成立するのである。

前節で触れた、子君が中国の新しい女性であり中国のノラであるという説とは異なり、恋愛の相手である涓生がいなければ、子君が勇敢に自主的婚姻を求めることは考えがたい。また、意識上の強者になるのも難しいと筆者は考える。

## 2.2. 現実生活の弱者

子君と涓生は共同生活を始めた後、色々出来事が相次いで起こり、日常生活の中で子君の弱点がだんだん現れてきた。

まず、近所付き合いがうまく行かない。借家の家主である官吏の奥さんが鶏を飼っており、動物好きな子君はそれを見て触発され、鶏を買ってきた。小さな中庭で家主の十数羽と一緒に飼ったため、奥さんといさかいになる。

次に、家事をこなすのが得意ではない。そのため、涓生と互いに不愉快さを感じはじめる。

子君の仕事も功績もすべてこの食事にかかっているかのようなようだった。食べては金の工面をし、工面しては食べる。そのうえ阿随に食わせ、鶏に餌をやらねばならぬ。彼女は、かつて理解したことをすっかり忘れてしまったようだった。僕の思考が、この食事の催促のために、しょっちゅう中断させられることにも気づかなかった。(『魯迅全集』2, p.326)

再就職に向かう涓生に対して、子君は気を使わず、「以前のような、もの静かで、よく気がつく女ではなくなった」(前掲)と涓生に思われる。

更に、毎日の食事にも苦しいのに、子君は、家主の奥さんに見栄をはるため、減多に口にしない羊の肉をペットの犬阿随に与えた。

このように、近所付き合い、毎日の食事、鶏、ペットの犬阿随の世話など、外で働いている涓生より、家を中心にする子君のほうがやらねばならないことが多い。しかし、片付けた結果からみると、子君は殆どうまくできていなかった。子君が日常生活の能力に欠けていることが窺える。この弱点を持つことにより、子君は、日常生活の中で生じた問題を解決できず、その問題を解決しようとするこゝろさえ考えていなかった。この段階の子君を現実生活の「弱者」と位置づける。日常生活の中で表れた弱点は、子君の内面に弱さをもたらす。涓生の失職を聞いた際、子君の内的な弱みがつい表に現れた。涓生の辞職の通知を見た瞬間、

あの恐れ知らずの子君まで顔色を変えたのが、特にこたえた。彼女は、このごろだいぶ臆病になったようだ。(前掲, p.324)

こんな些細なことが、毅然としたおそれ知らずの子君に、これほど顕著な変化を与えようとは、まったく予想しないことだった。今夜始まったことではないが、彼女はちかごろ、本当に臆病になってしまった。(前掲)

子君が臆病になるのは、生活の自立能力に欠け、そのうえ厳しい現実にあふつき、対応できなくなった結果である。

現実生活の弱点により、臆病になってきた子君は、涓生との間にひびが広がっていった。どうしたらよいか分からない子君は、現実から逃避し、幻想に浸かり、精神的な救いを求めている。救いの方法は、毎晩涓生とのプロポーズの再演であった。子君にとっては、プロポーズされた時が一番幸せを感じる時期であったが、涓生にとっては、一番恥ずかしくて思い出したくない時であった。ゆえに、プロポーズ再演の行動に対して、子君は熱心であったが、質問され、暗誦させられた涓生は、次のように言う。

追い詰められて、僕は虚偽のいたわりの答案をたくさん作り、いたわりは彼女に示し、虚偽の草稿は自分の心に書きつけた。僕の心は、これら虚偽の草稿でしだいに埋めつくされ、息もつけない感じになった。(前掲, p.330)

唯一の頼りにする涓生の愛は、だんだん変わっており、形しか残っていなかった。この段階の子君を、涓生は次のように感じている。

彼女の作り上げた思想と恐れを知らぬ自由な言論は、結局は空虚なものに過ぎなかったのだ。しかも、自らその空虚に気づいていない。彼女はとくに本を読まなくなっていた。人の生活にとって一番大事なのが、生きる意志であり、この生きる為の道に向かって、人は手を携えてともに行くか、あるいは戦いつつ一人行くしかないことを忘れてしまっている。(前掲, p.331)

厳しい現実の中で、「人はまず、生きねばならぬ。愛はそれに付随するものだ」と考える涓生は、子君との共同生活を通じて、理想の虚しさを悟った。一方、同じ現実問題に悩んでいる子君は、解決方法を見つけられず、涓生を以前の愛に引きもどそうとした。

封建的な家庭の反対を押し切り、自由な恋愛を経て愛する人との共同生活を選んだ子君は、日常生活の能力に欠けることにより生活をうまく営めず、特に経済的な自立手段がないために、涓生の失職で最後の自信を失い、現実生活の弱者になった。現実生活の中で表れた子君の弱点は、涓生に不安を与えると同時に、厳しい環境の中で築き上げた近代的な小家庭の基盤も揺るがした、と筆者は考える。

### 3. 結び

本稿では、以上のように「傷逝」の子君について考察し、子君が意識上の強者でありながら、現実生活の弱者であることを分析した。封建礼教が個性、自由を束縛することや、親の命令と仲人の取り持ちという伝統的な縁組などに対して、五・四前後の青年知識人である子君は、不満を持ち始めた。そして、涓生と恋をし、彼の影響を受け、自主的な婚姻を求めることは、旧社会においては積極的な意味があると言える。しかしながら、経済的にも日常生活面でも自立能力を持っていないという限界の中では、「個性の解放」、自主的な婚姻、男女平等といった新思想は、子君の意識上の自覚に過ぎない。

更に、共同生活が始まり、厳しい現実環境の中で近代の自由な恋愛観で作り上げた小家庭を如何に維持するか、日常生活の中で直面した現実問題をどうやって解決するかなどのは、生活の能力に欠けることにより、子君は、積極的に考えることができない。結局日常生活から精神面まで涓生を頼りにせざるを得ず、最後には見捨てられることになる。涓生の選択に全面的に賛成することはできないが、現実生活で自立できない弱点を持つ子君自身にも二人の破綻を免れ得なかった責任の一端があると筆者は考える。

「傷逝」の主人公涓生と子君は、二人とも自主的な婚姻を求めるが、共同生活の中で、各自が持つ弱点が明らかに現れることにより、自身の弱点を認識することができず（特に子君）、克服することもできず（この点においては涓生の責任のほう大きい）、意志の疎通を欠き、自由恋愛で築き上げた小家庭が破綻に陥る。これが「傷逝」の主題であると考えている。

### 注

- 1 五・四運動とは、1919年5月4日の北京の学生デモを発端として中国全土に波及した反帝国主義運動。中国の新民主主義革命の出発点となる。のち、反伝統の新文化運動に転じ、近代中国の政治、社会、文化、思想に大きな影響を与えた。
- 2 「三綱」とは、君は臣の綱、父は子の綱、夫は妻の綱。「五常」は、仁、義、礼、智、信をさす、つまり父子間の親愛、君臣間の正義、夫婦間の区別、長幼間の序列、朋友間の信義。「三綱五常」はおおむね縦の人間関係として、日常生活のうえでその秩序を具現するための実践道徳であった。（『岩波哲学・思想辞典』p.737）「三綱五常」の「君は臣の綱」、「夫は妻の綱」、「夫婦間の区別」は旧道徳として新文化運動（1910年代後半）により批判される。
- 3 旧社会とは、多く 1949年の中華人民共和国成立前の後れた社会を指す。
- 4 この小家庭破綻の原因を根本的には旧社会の重圧にみるのが、唐弢（1981）、張永泉

- (1987)、趙曉笛、憑奇(1987)、林非(1996)などである。
- 5 中井政喜(1987)によると、近代の恋愛観とは、「恋愛とは、相互の人格を認めた上での、愛情に基づく精神的肉体的な向上を契機とする結びつきであり、結婚はこの恋愛を道徳的基礎とするものだ、と考えている、と思われる(これを近代の恋愛観と私は称しておきたい)(p.107)。」である。
  - 6 中井政喜(1987)、李希凡(1988)、下出宣子(1996)などがある。
  - 7 丸山昇(1981)、中井政喜(1987)、杉野元子(1993)、永井英美(2001)などである。いずれも二人の破綻について涓生のほうにより重く責任を求めている。
  - 8 伝承文学『梁山伯祝英台』のこと。東晋(317 - 420)、祝氏の娘英台は男装して遊学し、書生の梁山伯と共に三年間仲良く学業を積む。英台は山伯に恋い慕い、別れる時に、妹と婚約をしに来てほしいと頼む。山伯が彼女の家を訪ね、彼女が女であり、その妹が実際英台自身のことを初めて知り驚く。英台の両親に英台との結婚を求めるが、英台は既に富家の息子と婚約が決まっている。失意のうちに山伯が死す。嫁ぎに行く前に、英台が山伯の墓を参り、号泣すると墓が裂ける。英台が飛び込み、その後、つがいの胡蝶が墓から飛んできて、舞っていく。『梁祝』とも言う。  
英台は山伯に愛する気持ちを親に素直に言えないし、婚約されることも反抗できない。つまり礼教社会では、結婚は親が決めることであり、恋愛の自由は許されない。
  - 9 新文化運動とは、1917年から1921年にかけて展開された中国近代史における文学・思想の改革運動。科学と民主主義を標榜して中国革命を妨げる儒教的・封建的な文化・制度を批判したが、その過程で五・四運動を導き出す。
  - 10 中井政喜(1987)によると、涓生の免罪論とは、「涓生の考え方と魯迅の主張との混同、ひいては涓生と魯迅との混同と、因果関係をなしているもの(p.100)」である。

### 参考文献

- 唐弢 1981 「婦女解放の道路——記念魯迅誕生一百周年談他幾篇關於婦女解放的作品」『魯迅研究』4 中国社会科学出版社
- 張永泉 1987 「『傷逝』と個性解放」『魯迅研究』10 同上
- 趙曉笛、憑奇 1987 「論『傷逝』と個性解放問題」『魯迅研究』11 同上
- 王維平 1987 「『五四』時期初步覺醒的青年自身弱点的深刻而豐富的揭示——『傷逝』悲劇原因試析」『魯迅研究』11 同上
- 李希凡 1988 「幻想・破滅・求生——論『傷逝』の時代意義和子君的悲劇形象」『李希凡文芸論著選編』 春秋出版社
- 林非 1996 「『傷逝』と個性解放的思想——与許地山、淦女士等小説的比較」『中国現代小説史上的魯迅』 陝西人民教育出版社
- 丸山昇 1981 「『傷逝』札記」『中哲文学会報』6
- 中井政喜 1987 「魯迅『傷逝』に関する覚え書」『言語文化論集』第9巻第1期
- 杉野元子 1993 「悔恨と悲哀の手記——魯迅『傷逝』と森鷗外『舞姫』」『比較文学』36
- 下出宣子 1996 「寂寞の記憶——魯迅『傷逝』について」『季刊中国』47
- 永井英美 2001 「魯迅『傷逝』論」『野草』68